

学 位 論 文 の 内 容 の 要 旨

氏 名 橋本 晴美 印

(学位論文のタイトル)

Development and Validation of the Total Dyspnea Scale for Cancer Patients
(がん患者の呼吸困難感包括評価尺度の開発と信頼性・妥当性の検討)

(学位論文の要旨) 2,000字程度、A4判

がん患者の呼吸困難感が多側面に影響を及ぼす体験であり、Total Dyspneaの視点による包括的な支援が不可欠である。しかし、支援の必要性を明確化するための呼吸困難感を包括的に多次元から測定できるアセスメントツールが存在しないことから、新たな尺度を開発する必要性があった。本研究の目的は、がん患者の呼吸困難感を包括的に測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討することである。国内の6つの総合病院において、がんに関連する呼吸困難感を自覚した経験をもつ239名のがん患者を対象に自己記入式質問紙調査を行った。

尺度項目の原案は、呼吸困難感を自覚した経験がある患者の質的研究や文献検討をもとに作成し、10名のがんエキスパートにより内容妥当性が確認された。また、尺度項目の因子分析により構成概念妥当性を構築し、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析の結果、2因子11項目構造を採用した。2因子は【日常生活活動や心理への影響】と【社会生活への影響】と命名され、「がん患者の呼吸困難感包括評価尺度 (Total Dyspnea Scale of Cancer patients : TDSC)」が完成した。

また、Amosによる確証的因子分析の結果、適合度指標は、GFI=0.876、AGF=0.842、CFI=0.936、RMSEA=0.108とわずかに水準を満たさない項目もあったが、パス係数については、すべて0.4以上 ($p<.01$) の受容できる水準を満たす指数が確認された。また、尺度全体のCronbach's α 係数は0.952 ($p<.01$) であり、高い信頼性が確認できた。また、各下位因子のCronbach's α 係数は、【日常生活活動や心理への影響】は0.947、【社会生活への影響】は0.859で、0.80以上の基準を満たしたことから、尺度全体と各下位因子における内的整合性が確認された。また、折半法によりSpearman-Brownの公式を用いた信頼係数を算出した結果、信頼係数は0.909 ($p<.01$) を示し、尺度の安定性が確認された。また、尺度と外的基準との関連について検討し、CDS、BCWI、FACT-Gとの関連から基準関連妥当性が確認された。

以上より、呼吸困難感を包括的に多次元から評価できる簡便性に優れた尺度である「がん患者の呼吸困難感包括評価尺度 (Total Dyspnea Scale of Cancer patients:TDSC)」を世界で初めて開発することができた。